

THE AMERICAS TODAY



天理大学アメリカス学会ニューズレター

NO. 61

2009年11月

Special to the Newsletter

アメリカス 2000 マイルで区分された「北」と「南」

片倉 充造

オバママジョリティ

米国第44代バラク・オバマ大統領の今春4月5日のプラハ演説が話題となった。「核のない世界を目指す」(「毎日新聞」2009.7.27)との唯一核兵器を使用した核保有国としての道義的責任を自認する論調は、唯一の被爆国日本で好意的に受け留められ、広島市長・長崎市長を中心に、核廃絶を標榜する多数派の市民であるマジョリティが、この声とともに行動する平和運動の機運が高まりつつある。「原爆投下」「太平洋戦争」終結以後64年を迎え、あの“厳しかった時代”の記憶が徐々に国民の意識から薄れていくことに歴史の恐怖を思わずにはいられないところだが、メキシコの外交官(在バルセロナ領事・駐ブラジル大使他)・文学者(詩人・小説家)であったホセ・ルベン・ロメロ(1890~1952)の『全集』でも原爆

批判は明らかであり、スペイン語圏の教養人にとっては、バスク地方のゲルニカ爆撃(1937) ヒロシマ・ナガサキ(1945) ベトナム戦争(1960~75)は連関する人類共通の悲劇である。唯一の投下国と被爆国とが、未来永劫唯一無二であるための歴史教育や平和教育は喫緊の課題となるだろう。米国政府代表による被爆地への公式訪問はいつ頃実現するのだろうか？

ヒスパニックの躍動

“19世紀の英国・20世紀の米国”とは、経済大国No.1を表す称号であるが、21世紀に入り米国域内では、白人に続きヒスパニック系人口が黒人系を越えて第2グループを占めるようになった。こうした増加傾向は簡単に収束する状況にはない。market marqueta, enjoy enjoyar などスパングリッシュ(SpanGLISH)は、ヒスパニック系文化の活力を反映する混成語であり、当該の自治体では行政上スペイン語での表示・案内さらには教育・医療までもが提供されている。

筆者は、幼時には家族とともに「怪傑ゾロ」(ガイ・ウィリアムズ主演)というウォルト・ディズニー制作のTV映画をよく観たものだが、“アメリカなのに”ドン・ディエゴ、ベルナルド、ガルシア軍曹の登場人物(名)に加え、一風変わった音楽性など、どうして英米語以外の響きがあるのか、わからずにいた。21世紀の現在にあっても、「ラテンアメリカ文学

概論」を受講する英米・独・仏・露・西・伯葡語の専攻生を前にあえて同様の質問を投げかけることにしているが、その謎解きはメキシコと米国の関係史を引証すれば簡明だ。テキサスの米国への併合(1845)を要因とした米墨戦争(1846～48)の結果、メキシコは当時の北方領土(全体の52%相当)を米国へ割譲したからである。カリフォルニア/アリゾナ/ニューメキシコ/テキサス等は、以前メキシコ領であり、スペイン領でもあった。サンフランシスコ(聖フランシスコ)、ロサンゼルス(天使たち)、ラスベガス(沃野)等、とりわけ地名は根強く残されている。さらにヨーロッパからコロンブスが到着(1492)するまでは、そこはアメリカ先住民の地であった。

メキシコを代表する世界的知識人カルロス・フエンテス(1928～)は、ガルシア＝マルケス(コロンビア、1928～)やバルガス＝リョサ(ペルー、1936～)とともに 魔術的リアリズム をキーワードとする「ラテンアメリカ文学ブーム」の中心作家の一人でもあるが、父親が外交官であったため、中南米の主要都市を転住する一方、6歳から12歳までは米国ワシントンDCに在住した体験があり、自己アイデンティティの探求には苦悩を深めた。「北から竜巻(メキシコ革命)が下りてきて、俺たち根っこの深くない連中はまるっきり四散させられちまった。(略)たとえ話ぬきで言えば、金持ち、坊主に、愚たら、ならず者たちを巻き込んだのさ」(ルベン・ロメロ『ピト・ペレスの自堕落な人生』、小沢、行路社、2000)とその猛威が形容される「メキシコ革命」争乱期を経て、1920～30年代になると、“メキシコ人とは?”というアイデンティティ模索が積極的に進められ、サムエル・ラモス『メキシコ人とは何か』(1934、山田睦男訳、80)やオクタビオ・パス『孤独の迷宮』(1952、吉田秀太郎訳、76/高山智博・熊谷明子訳、82)に続きフエンテスも『メヒコの時間』(1971、西澤龍生訳、75)を発表する。

別けても小説『古いぼれグリンゴ』*(*Gringo Viejo*, 1985、安藤哲行訳、94)は、プロテスタントやカトリックの教理・信仰生活の対比を始め、米墨両文化が対照される名品である。ほぼ原作小説通りに再現された映画作品 *Old Gringo* (オールド・グリンゴ、ルイス・プエンソ監督、コロムビアトライスター制作、米国、89)は文学教材としても有効であり、グレゴリー・ペックやジェーン・フォンダ他華やかなキャストは壮観ですらあった。この鑑賞は翻訳とスクリーンとの異同も含め、両文化への理解を大いに促すものであり、受講生からの反応も依然として高い。1913年のワシントンDCやチワワ(メキシコ北部)を主な舞台に、機械文明の飽くなき進展を続ける“米国の在り方”に警鐘を鳴らし、「南」へ越境した文筆家グリンゴ(*gringo*、一般にメキシコや中米では北米人の意。当該作品では『悪魔の辞典』**を著したアンブローズ・ピアスとして後に判明)と、時を同じくして“単調で欺瞞に包まれた日常生活”を苦に「南」へ脱出した小学校教師ハリエット、そしてこうした二人を順次受け入れることになったメキシコ革命派の青年将軍トマス・アローヨの3主人公を中心にストーリーが展開する。ハーバード大学・コロンビア大学でも教鞭をとるなど米墨を熟知する文化人フエンテスの論旨は、中南米を自国の 裏庭 とみなし、「民主化」を合言葉に侵攻を重ねた、マニフェスト・デスティニ(=明白な運命)に支えられた米外交を許

容するものではない。キューバへの軍事干渉(1906)/ニカラグアでの海兵隊駐留(12~25)/ハイチの軍事占領(15~34)/ドミニカ共和国の軍事占領(16~24)そして近年ではチリのアジェンデ社会主義政権への介入(73)/パナマ侵攻(89)とノリエガ將軍米国への投降(90)……。もちろん国境の「南」メキシコでも、前述のとおり、テキサス併合(1845)/米墨戦争(46~48)はもとより、米大使館を介したマデロ政権の打倒(1913)/ベラクルス占領(1914)/パンチョ・ビリャ懲罰隊の北部侵入(16~17)/等々、欧米両大陸間の相互不干渉を謳う「モンロー宣言」(1823)にも依拠した「北」の足跡はあまりにも大きい。識者の思索はむろん、支配・従属ではなく並列な共生関係に帰結する。「民主主義と進歩のために我々にメキシコを救ってほしくありませんか?」「(略)わたしはメキシコとともに生きることを学びたいんです。メキシコを救うというのは嫌です。」(ハリエット、p.258)。「大切なことは、進歩と民主主義に関係なく、メキシコとともに生きることだ」(グリーンゴ、同)。

小説の続編とも目されるスペイン系アメリカについての歴史・文化・社会評論『埋められた鏡』(1992、古賀林幸訳、1996)でフエンテスは、「ロサンゼルスは現在、メキシコシティに次ぐ世界第2のスペイン語人口都市」(p.409)とも、「21世紀半ばには、合衆国の全人口の半数近くがスペイン語を話すことになる。」(p.410)とも指摘する。米・加・墨のNAFTA(北米自由貿易協定、1994~)の発効がかえって経済中進国メキシコからの「北」への不法入国者を増大させたことは、不可避の「現実」でもあった。米国のヒスパニック系人口がカナダ全体のそれを上回る「現実」は堅固である。

結びにかえて

19世紀には 人類の融合 を予言した民主主義の代表的文人ウォルト・ホイットマンが登場した(新井正一郎、『ウォルト・ホイットマン 架け橋のアメリカ詩人』、英宝社、2006 / 『アメリカ英語の歳時記』、近代文芸社、1999 参照)が、自ら複数の文化を体現するオバマ大統領が支持される時代状況、そしてソニア・ソトマヨル氏(ヒスパニック系)が最高裁判所判事に選任され、モンタナ州先住民クロウ族のジョセフ・メディシン氏に「大統領自由勲章」が授与された史的経緯からすれば、メキシコの賢哲が説く、「国境」にこだわらないバリアフリー、様々な障壁を超越する 共生 は、あながち構築不可能ではないだろう。

Yes, we can! ¡Sí, podemos!

* 池澤夏樹は近年、「アメリカ(合衆国)を相対化する」という象徴的な副題をそえて、20世紀を代表する世界文学(河出書房新社、2009)の一書としてこの小説を選別している。

** 筒井康隆は、『筒井版悪魔の辞典 完全補注』(講談社、2002)という斬新な訳書を刊行している。

(天理大学アメリカス学会会長 / スペイン・ラテンアメリカ文学)

文学の中のアメリカ生活誌 (52)

新井 正一郎

Alaska and Eskimos(アラスカ州とエスキモー)1898年にアメリカがハワイを統合するまでは、アラスカは、アメリカ50州のなかで、最初の地つづきでない領土であった。この地域は、ロシアの皇帝ピートル1世の命を受けて航海を試みたデンマーク人の海洋探検家 Vitus Bering なる人物によって、1741年に発見された。シベリアとアラスカ間の海峡は、彼の名を記念して the Bering Straits (ベーリング海峡) と名づけられた。1780年代、そして1790年代に、ロシアがこの地に植民地を築くと、当時のアメリカ人は、そこを Russian America (ロシア領アメリカ) と称した。その後3原住民の1つ、Aleut (アリュウト族) が、この地を「大なる土地」、「本土」を指す Alakshah とか Alayeksa という言葉で呼んでいたことにも影響され、ロシア領アメリカという地名は、ロシア語風に綴られた Alyaska に改名された。現在の Alaska という言い方になるのは、1867年である。次はウォルト・ホイットマンの『民主主義の展望』(1871)からの一節。「我々はテキサスやカリフォルニア、アラスカを併合し、北はカナダ、南はキューバを取ろうとして手を伸ばすが、それも無駄である」。

Aleutian Islands(アルーシャン列島)は、アリュウト族語の aliut(国外に)からのもので、1780年頃にロシア人が命名したもの。parka という言葉は、「動物の毛皮」という意味のアリュウト族語で、サモイェド語「となかいの毛皮」からロシア語を経由して生まれたもの。この語は、1868年からは「頭巾つきの毛皮の外皮」を指して使われるようになる。また、単に「頭巾」という意味で parka を使い始めるのは、1940年代初期からのこと。理由は、第2次大戦中、軍人たちに支給された防寒防風服に上述の頭巾がついていたからである。

19世紀半ば過ぎになると、ロシア政府はロシア領アメリカの経営に行き詰まった。1867年、時の国務大臣ウィリアム・スワードはロシアから720万ドルでその植民地を購入したが、大部分の国民の反応は芳しくなかった。彼等は凍てつく不毛の地に大金を出した彼の行為を Seward's Folly (スワードの犯した愚行) あるいは Seward's Icebox (スワードの冷凍箱) といって、非難した。この不毛地の地に合衆国軍による占領が始まるのは、1867年であったが、そこへ赴く兵士たちにはウイスキーが禁じられた。そこで彼等はその地域の別の原住民であるインディアン、Hoochinoo (フーチヌー族) から彼等の強い酒をこっそり仕入れ、飲んだ。フーチヌー族から購入したことに因み、1877年までには、強い酒あるいは不法の酒は、hoochinoo の呼び名で呼ばれるようになった。そしてクロダイクのゴールド・ラッシュが始まった1896年には、その言葉は短縮されて hooch となり、この呼び名は俗語名として今日まで用いられている。そういうわけで、Alaska と hooch の新語ができたのは、スワードの植民地購入とアラスカのクロンド川での金の発見の賜物でもある。

Eskimo という言葉は、東部カナダのアルゴンキアン族の語 eskameege (生肉を食べる人) から生まれたものである。植民地時代のアメリカ人は、それを Esquimaw あるいは Equimaux と綴った。家を指すエスキモー語 iglu は、アメリカではもう1662年から igloo という風に綴られて、使われていた。もっともこの語は、アラスカではなく、カナダやグリーンランドに住むエスキモー人から借りたものだ。sled dog (そり犬)、Eskimo dog (エスキモー犬) という言葉が、アメリカで初めて現れるのは、1810年代、「大きなあざらし」を意味するエスキ

モー語 mukluk は、1868年である。なお、この語は1902年からは、「あざらしの皮の長靴」を指すようになった。ついでにしるすと、1921年には、Russell Stover がチョコレートでコーティングされた棒付きアイスクリームを Eskimo pie という商標名で売り出した。

Horse and Conestoga Wagon (馬とコネストウガ・ワゴン) インディアンというと、多くの西部劇の影響もあって、馬に乗り幌馬車隊を襲撃する姿を想像しがちだが、1620年11月、ウィリアム・ブラッドフォードに率いられたイギリスの清教徒たちが、後にアメリカとなる未知の大陸に上陸した時。一行が目にしたこの荒涼たる原野に住んでいた原住民(インディアン)は、馬を持っていなかった。インディアンが馬を所有していなかったのは、イギリス移民たちがたどりついた頃の新大陸には、馬が通れるほどのまともな道路がなかったからだ。インディアンたちは移動する時は、荷物をさまざまな紐で背にくくり、後に trail (1807年の言葉)と呼ばれる幅30センチ程の踏み分け道を徒歩で進んだのである。というわけで、植民地時代の開拓者の多くは、ほとんどどこへも出かけず、教区教会の鐘の音が聞こえる範囲で暮らしていた。イギリスからの入植が海岸線と大西洋に注ぐ河川沿いに行われた事実から明らかのように、彼らが慣れ親しんだ居住地から遠くへ行かなければならない時は、自然の水路(河川、入り江、沼)を利用した。17世紀後半、アラン・ゾ・デレオンの率いるスペインの遠征隊がテキサス州東部に、農園の建設に必要なものとして、牛とともに馬を運びこんだことが触発となり、馬の数は増し、道路も馬や荷馬車が通れるように改良されていったが、前記の水路の利用が東部では1800年まで、西部においては1860年頃まで国内の支配的な移動形態であった。

19世紀に入ると道路が改善され、新しい乗り物が登場したことで、船での移動は姿を消し、北部では徒歩、1頭だての2輪荷馬車、2頭だての4輪車などで旅をする人々が目立つようになった。一方乗馬の技術に自信を持つ南部の大農園経営者は、馬車より馬で旅をしていた。新しい乗り物で混雑していた当時の道路風景のなかで、特筆すべきものは Conestoga wagon (「コネストウガ・ワゴン」、1740年代の言葉)とか単に Conestoga (「コネストウガ」と呼ばれた前後が船のように張り出した荷台の大きな9人乗りの幌馬車だった。この呼び名は馬車製造地であったペンシルヴェニアの町コネストウガに因む。1750年、マサチューセッツ全体で4台の大型4輪馬車しかなかったが、ペンシルヴェニアには38台あった。ベンジャミン・フランクリンは1771年に書き始めた『自伝』の中で、この町の人々の豊かな暮らしぶりを、「たいていの人々が、馬車(当時の経済的に中流の証し)を持っている」と記している。Conestoga は平和のときだけでなく、戦争時にも使われた。独立戦争中、リードなる人物は最高司令官ジョージ・ワシントン宛の手紙で「大陸軍はペンシルヴェニアから馬と馬車の供給を受けた」と報じている。また第2次英米戦争(1812~14)の時、Conestoga は前線の部隊への武器の供与、食料などの運搬に大きな役割を果たした。鉄道が登場しても、この白いキャンパスの帆がかかった大型馬車は、大平原から消えず、prairie schooner (プレイリー・スクーナー、1841年の言葉)と名を変えて、太平洋岸に向って西部の大草原をゆっくり走っていた。

(天理大学名誉教授)

CALL 授業の実践と展望 ポルトガル語 CALL 教材を例に

村松 英理子

平成 20 年に全国 1218 の大学・短大・高専を対象に実施された、放送大学 ICT 活用・遠隔教育センターの調査によれば⁽¹⁾、PC やインターネット、携帯などを利用した学習形態、いわゆる e-learning を導入している教育機関の割合は、大学で 81.6%、短期大学では 53.3% であった。このように、近年高等教育の現場に広く取り入れられている e-learning システムは、外国語教育においても、LL 教室にとってかわり、CALL (Computer-Assisted Language Learning 教室として、急速に導入されている。

CALL 教材の特徴としてまずあげられるのは、時間や場所を選ばずに、マイペースに学習ができるという点である。語学に欠かせない単語の暗記や、簡単なヒアリング、長文読解など基礎的な学習は、個別にじっくり取り組まねばならないが、こうした作業に授業内で時間を割く事は難しいため、個人ペースで学習できる CALL 教材は、有効であると考えられている。次の利点は、文字、音声、映像、画像の連携した教材を、簡単に利用できる点である。かつて LL 教室で、VHS、カセットテープ、紙媒体で扱われていた音声、映像、画像、テキスト教材は、デジタル化されることで、加工、再生、保存、また教材の配布といった作業が非常に容易になった。また学生に対しても画像と音声の利用により、インパクトのある授業が可能である。

こうした点が認められ、高等教育の場において、様々な目的をもって多様な形で導入されている CALL 教材であるが、その導入場面は、教員による対面授業の補足として用いられる場合と、教員不在の教室以外の場所で自主学習に使われるものの二つに大別できる。語学教育の場では、「言語はコミュニケーションである」という前提から、あくまでも教員による対面授業の補足として、CALL 教材を利用する場合が主流である。しかし、個人学習が中心となるような語学の基礎的な学習に関しては、放送大学などのサテライト授業による単位取得や、京都大学の、教員不在の中、学生が CALL 教材を自習し単位認定を行う形態もすでに実施されている。

2003 年より京都外国語大学に導入されている CALL 教室では、各専攻語の個別授業の他、二言語同時学習「CALL EX」として、英語の教員と外大に設置されている他言語の専門教員によるチームティーチングが行われている。学内には録音スタジオや教材作成室が置かれ、CALL 教室で使用される教材作成が

可能である。ポルトガル語の場合、高等教育で利用できるような CALL 授業に対応した教材は、現在のところほぼ皆無といってよい。一般に公開された教材として、東京外国語大学の言語モジュールなどが存在するものの、他大学で無料で公開されているものを授業で利用することは現実的ではない。また、教材作成を外注するとすれば、それは莫大な費用が必要とされ、こちらも実際には不可能である。こうしたポルトガル語の現状により、自家出版として作成されたのが、『CALL ポルトガル語発音編 Portufone 2009』である。この教材には、ポルトガル語の音声の習得をターゲットとして、音声学の基礎的な解説と、ポルトガルとブラジルの音体系についてまとめられた PDF テキスト、さらに約 700 語についてブラジル発音、ポルトガル発音それぞれが CDrom に収録されている。これらはユーザー登録した学習者がオンラインで利用できるようになっている⁽²⁾。以下、参考までに教材作成に使われたソフトをあげておきたい。

- Sound it! : インターネット社によるデジタルサウンド編集ツール
- Flash : アドビシステム社による映像、アニメ、音声などを扱えるソフト
- Snaps Pro : Ambrosia Software 社のムービーキャプチャーツール
- i Movie : MacOSX に対応した動画編集アプリケーション
- Adobe GoLive⁽³⁾ : アドビシステム社の Web オーサリングツール

今後、学生一人当たりの PC 利用の増加など、ハード面での環境整備に伴い、語学教育の中で、CALL システムを利用した授業や個人学習は、確実に主流になっていくであろう。そして、このシステムに対応した教材の開発・作成が急務であるが、これをどう行いかは、CALL 授業の担当教員のみにかかされるべきものではなく、綿密に計画された授業デザイン、学習目標を慎重にふまえた上で、学科全体として取り組まねばならない問題である。また、CALL 教材の開発及び作成には、かなりの時間と労力が必要であり、マンパワーの確保を含めた(これを外注するとすれば、非常にコストがかかる)学内での教材作成のための環境整備も必須である。

(京都外国語大学外国語学部
ブラジルポルトガル語学科 非常勤講師)
(1) メディア教育開発センター「e-ラーニング等の ICT を活用した教育に関する調査報告書(2008 年度)」, <http://www.nime.ac.jp/reports/001/>

(2) 彌永史郎・村松英理子(2009)『CALLポルトガル語発音編 Portufone 2009』GELP
<http://www.kufs.ac.jp/Brazil/03docentes/>

[iyana/myhp_va.html](http://www.kufs.ac.jp/Brazil/03docentes/iyana/myhp_va.html)

(3) 2008年に販売終了となったが、Dreamweaverへの移行が推進されている。

Essay

海を渡った宗教学者 北川三夫と 第二次世界大戦後のアメリカ宗教学の発展

東馬場 郁生

大阪で生まれ、のちにアメリカに帰化した北川三夫(ジョセフ M. キタガワ: 1915 - 1992、以下キタガワ)は、シカゴ大学で教鞭をとりながら、戦後のアメリカの宗教学の発展を支えた功労者である。ここでは、キタガワの視点を通して、第二次世界大戦後のアメリカの宗教研究について描写したい。

キタガワは、立教大学卒業後渡米し、第二次世界大戦下、3年半を日系人収容所で過ごした。収容中に、聖公会司祭に叙階されている。1947年、シカゴ大学神学部大学院に入学し、宗教(史)学を専攻、1951年に博士号取得後、同大学院に教員として迎えられた。1969年～72年にアメリカ宗教学会会長、1970年～1980年、シカゴ大学神学部学部長、さらに、1975年～1985年、国際宗教史宗教学会副会長をつとめた。

キタガワによれば、彼が宗教学者として活動を始めた「1950年代と1960年代は、宗教学にとって有意義な時期だった」という。それは、「北米は、ついに、ヨーロッパ中心の夢からさめて、非西洋世界に目をひらき始めた」からであり、「また、1950～60年代には、公立、私立両方の、多くの単科大学や総合大学が、標準カリキュラムの一部として宗教研究の課程を立ち上げた」からである。すでに、1950年代の北米の大学では、ハーバード大学やコロンビア大学などを中心に、少なくとも300人の教授が、人文科学や社会科学の科目に採り入れられた宗教学関係の講座を担当していたという。

しかし宗教学の隆盛の一方で、キタガワは、「その内容については北米では大いに誤解され続けている」と危惧していた。宗教学とは価値判断を含むのか、あるいは知的理解を目指すのか。宗教の本質を問う宗教哲学か、実証的研究をする社会科学か、あるいは独自の分野か。宗教研究に対する混乱が、「比較宗教」、「宗教現象学」、「宗教史学」などさまざまな名称を生んだ。当時、宗教研究の多くは社会、人類、歴史、神学などの視点から宗教を扱っており、諸学に囲まれて「宗教学」の立場は不明確だった。

このような状況下、キタガワは、ヨウキム・ワッハやミルチャ・エリアーデとともに、宗教学の理論と方

法の確立のため尽力し、宗教研究におけるシカゴスクール(学派)の形成に貢献することになる。

シカゴ学派の宗教学とは、宗教の意味の理解を目的としたもので、歴史的に存在する諸宗教を対象とした研究であり、記述的学問である。そこでは、宗教現象の独自性とそれにふさわしい方法の主張がなされた。他の研究方法はみとめつつも、別の照合次元に還元することを警告したエリアーデの「非還元的方法論」の主張に、その典型をみることができる。

さらにキタガワには、宗教学における西洋と東洋という課題も残されていた。彼は、宗教学の「欧州的」、「西洋中心的」すぎる事実を指摘している。それは、西洋の研究者が、宗教学の名の下に、東洋宗教の地域的特殊性を無視して、自分の組み立てた抽象的体系の中に諸現象を分類してしまう傾向である。キタガワは、諸宗教を対象とする宗教の科学的研究として宗教学が発展するためには、「これまでの研究方法や研究範疇を、西欧人以外の宗教学者の手によって批判、かつ再検討をする必要がある」と主張した。

キタガワの主張の背景には、60年代のアメリカの市民権運動と反戦運動が人々に文化の多様性の感覚を目覚めさせ、それまで宗教、芸術、人文科学を彩っていたヨーロッパ中心主義に疑問が呈されたことがある。実際、現在の宗教研究は、60年代の(若者の)反体制文化と切り離せないともいわれる。他の文化伝統の良さを確信した多くの学生が、さまざまな宗教の研究に引き寄せられたのであった。

また、同時期、宗教研究を公立の学校でみとめる最高裁判所の判決(1962年、1963年)が下されたことは、宗教学全体に大きな影響をあたえた。宗教研究の場が拡大した結果、宗教研究の方法が変化し、宗教的権威や神学的かかわりによる規制が弱くなり、全ての宗教を多種多様な方法で研究することが可能になった。

戦後アメリカの宗教学界におけるキタガワの位置を改めて確認するなら、「宗教学」方法論の古典となる論集を編集するなど、宗教学説史の権威者としての彼の側面をまず評価したい。「宗教学」の在り方、とくに方法論を常に考え、シカゴ学派を支え続けた存在である。シカゴ学派の歴史化が進む今、キタガワの業績が批判の対象として取り上げられることは少ないが、彼こそは戦後アメリカの宗教学発展の証人であ

り、とりわけそれを牽引したシカゴ学派のいわば大番頭であった。理論家としては、ワッハやエリアーデのような影響力はなかったが、東洋宗教の専門家として、日本からの留学生を含む多くの研究者を指導し、世界に排出した業績も忘れてはならないだろう。

戦後、世界の宗教学を席卷したシカゴ学派形成に最も貢献した3人の研究者(ワッハ、キタガワ、エリアーデ)がみな外国からの移住者であり、そのうちの一人が日本生まれの北川三夫であったことは興味深

い。私がシカゴ大留学中、彼は「この大学で最初に博士号をもらったのは日本人なんだよ」と教えてくれた。そのとき、戦前に海をわたり、宗教学者として確固たる世界的地歩を築いたキタガワ自身が、それ以上に大きく偉大に思えたのは当然のことである。

参考文献：Kitagawa, ed. *The History of Religions: Essays in Methodology* (1959); Kitagawa, *The History of Religions: Understanding Human Experience* (1987) 他。
(天理大学国際文化学部教授)

Essay

ご祝儀の値段 メキシコシティにおける 結婚披露宴の舞台裏

小林貴徳

「この度私も二人は・・・ささやかな宴を持ちご披露を・・・ご多忙のところ恐れ入りますが・・・」といった文面が含まれた連絡を受けると「祝儀はいくら包んだものか?」という問いが頭をよぎる。熟考の末、その「値」は新郎新婦との関係性や他の招待客の構成によって決められるだろう。結婚式に付随する披露宴の開催という現代の日本で半ば慣習化した行事への出席をめぐる、上のような問いに頭を悩ますことは日本人ならば通常の反応といえる。ところで、こうした祝宴や祝儀は日本の外ではどう実践されているのだろうか。長期間の外国生活を体験した人であれば、現地滞在中に結婚式や披露宴へ招待された経験が1度や2度はあるはずである。ただし、そうした機会はいくまでもゲストとしての参加であるし、日本と趣の異なる儀式的、祝祭の雰囲気の中かで非日常的な時間を過ごすため、宴そのものの詳細を憶えていることや、その舞台裏に意識を向けることは容易ではない。そこで本稿では、アメリカス世界の実態を探る一例として、メキシコ合衆国都市部の事例を取り上げる。以下、メキシコシティ首都圏における冠婚習俗の概略を述べるとともに、ホスト側の視点に立ちつつ披露宴の組織化および構成要素について紹介することにしよう。

1. メキシコにおける結婚と披露宴

メキシコの日常に見出される習俗といえ、例えば、洗礼 (*bautizo*) や初聖体 (*primera comunión*) などカトリックの秘跡が挙げられ、婚姻 (*matrimonio*) もそのうちのひとつの重要な人生の節目である。一方、披露宴 (*fiesta de boda*) は、婚姻に際しておこなわれるものの宗教性が弱く、個人や家族が信仰する宗教に左右されにくいもののひとつである。そのため、通過儀礼的な習俗のなかでも、15歳になった「成人」女性

を祝うキンセ・アニョス (*quince años*) のように世俗的習俗に位置づけられる。

人口の91%がカトリック信者とされるメキシコでは、婚姻の挙式はほとんどの場合教会でおこなわれる。たしかに最近では旧アシエンダの庭園やホテル内の施設、浜辺での挙式など教会外の選択肢が増えているようであるが、会場がどこであれ、司祭が神の名において式を執行する点は共通しており、結婚式自体の宗教性は維持されていると言える。このプロセスを宗教的承認手続きとするならば、証人の立会いのもと役所でおこなう婚姻証書 (*certificado de matrimonio*) の署名は行政的承認手続きである。一般的に、役所での届出ののち挙式という運びとなるが、これらの手続きとともに重要な意味、とりわけ社会的承認の場という意味を含むのが以下に示す婚姻を披露する宴である。

II. 披露宴習俗の構成要素

会場：祝祭の規模やホストの状況によって会場選定にはいくつかの選択肢がある。多用されるのがサロン・デ・フィエスタ (*salón de fiesta*) と呼ばれるイベント用貸しスペースである。披露宴以外にも誕生日やキンセ・アニョスに利用され、メキシコシティのどの地区でも2つや3つは存在している。また、分譲マンションの敷地内にサロンを併設しているケースもある。サロンはイベントの規模や使用時間別に基本料金があり、それにテーブルやイス、食器、給仕人などのオプションを追加できる。一方、結婚式をホテルや旧アシエンダなどでおこなう場合、そのまま同じ場所で祝宴を催すことが多い。言うまでもなくこのケースはサロンよりも高額な会場費を想定しなければならず、どちらかといえば富裕層が用いる傾向が強い。もうひとつの選択肢が自宅を会場とするものである。当然ながらマンション住まいの場合は困難であり、またある程度の人数を収容できる敷地の存在が前提となる。自宅開催であれば会場費を節約できるだけでなく、時間

的な制限もなくホスト側の精神的負担も軽減される。ただし祝宴に必要な物を自力で調達しなければならないという問題が生じる。そこで活躍するのが祝宴専門のレンタル業者 (*alquiladora*) である。あらゆるイベントに対応している彼らは、テーブル類、全天候型のテントや床板などの舞台装置、ビュッフェ (*taquiza*) からコース料理 (*banquete*) まで大抵のものを揃えてくれる。

プロセス: 披露宴は夕方から始まるのが通例であるが、式次第には決まったものがなく、以下に記すのもあくまで一例に過ぎないことを付言しておく。会場へ到着し新郎新婦に迎えられたゲストは新婚夫婦に贈り物 (*regalo*) を渡す。贈り物については後述するが、新郎新婦はこれを専用の机 (*mesa de regalo*) に並べる。楽隊の演奏が開宴を告げると、ホスト側代表が挨拶と祝福の乾杯をおこなう。晚餐を終えたゲストが歓談を楽しんでいる頃、楽隊は新郎新婦を踊りに誘う曲を奏でる。新婚夫婦はゲストの見守りな静かな曲に合わせ踊り、続いて互いの親、親族らと踊る。楽曲のテンポが徐々に速まると、ホストとゲストが入り交わった踊りの共演となる。そうしているうちに、披露宴に不可欠な花嫁のブーケ投げが始まり、独身女性が幸運のブーケ獲得のために身を投げ出す。その一方、花婿による花嫁のガーターベルト投げがおこなわれるケースもある。この場合、先とは逆に独身男性が幸運のガーターベルトをめぐる争奪戦を始める。祝宴がひとしきり盛り上がったところで新郎新婦によるケーキカットへうつる。夫婦が入刀したケーキは担当者によって手際よく分けられ、全員へと分配される。再び楽隊の演奏あるいはBGMが流れると、賑やかな披露宴は時間とアルコールが許す限り果てしなく続く。

役職: カトリックでは洗礼などの秘跡にともない実の親子ではない者のあいだに擬制的親子関係 (*padrinazgo*) が結ばれ、それぞれパドリーノ (*padrino*) とマドリーナ (*madrina*)、アイハードあるいはアイハーダ (*ahijado/ahijada*) と呼び合うようになる。婚姻でも同様に神の前でこの関係が結ばれ、両者は精神的に特別な間柄になる。既述のとおり披露宴は宗教性の弱いイベントであるが、この開催に際してパドリーノと呼ばれる役職が登場することがある。この場合は非宗教的な意味で用いられ、新郎新婦への経済的援助という役割を担う。祝宴の開催費用は新郎新婦やその家族が捻出するのが通常だが、メキシコでは日本のような現金による祝儀は存在しておらず、ホストの肩には経済的負担が重くのしかかることになる。そこで、この世俗的パドリーノシステムをとおして、祝宴にとも

なう支出、例えば料理や酒、ケーキや会場費、楽隊などの各種費用を分配することが可能となるのである。この役職を依頼された人物は申し出を快諾するというのが、それは名誉職に近い意味合いがこの役に含まれるからであろう。これとは別にマエストロ (*maestro*) と呼ばれる司会進行を担当する役職もあり、同じく名誉職として認識される。

祝儀: メキシコで披露宴に出席するとき何を贈るのか、という問いは「祝儀にいくら包むか」と苦悩する日本人にとって悩ましい問題である。第一に、現金ではない。メキシコではゲストから現金を受け取ることが好まず、祝宴に会費制が導入されることもない。ゲストに経済的負担をかけないのが原則といわれる。祝儀に相当するものといえば会場到着の際にゲストが新郎新婦へ渡す贈り物である。この贈り物には決まった形式はなく、また全員に課される義務でもない。これは新婚夫婦への祝福をこめてゲストが事前に贈り物を用意するもので、ゲストの個性や熟慮の結果が反映されるため日本のケースに比べ多様な形態をとる。新婚生活の必需品としてテーブルセットや食器類、調理器具などの台所用品や電化製品が選ばれることが多い。ゲストの心遣いがあらわれるこの贈答システムだが、実は問題を抱えている。それはコーヒーマーカー3台やミキサー2台など物が重複するケースであり、せっかくの心遣いが裏目に出てしまうときである。そこで近年注目されているのが、百貨店の販売戦略「メサ・デ・レガロ (*mesa de regalo*)」、言わば登録制カタログギフトである。*El Palacio de Hierro* や *Liverpool* などの百貨店は、新郎新婦が希望する商品のリストを作成し、祝宴招待客に向け公開する。店頭だけでなくインターネットでの検索や購入も可能であり、誰かが購入するたびにリストには「済」の印がはいる。これにより、これまで贈答品選択に頭を悩ませていたゲストの気苦労が軽減されるとともに、新郎新婦も欲しいものが手に入るというわけである。さらに百貨店の売り上げも伸びるというまさに一石三鳥の祝儀システムとなっている。

引き出物: 新郎新婦の写真がはいった皿などは日本よりもメキシコに似合いそうなものである。しかし実際は、絵皿どころか日本のような引き出物というシステム自体が不在であり、よって新郎新婦は引き出物の選定に気をもむ必要がない。それではゲストが持ち帰る物がないのかと言うとそうとも限らない。祝宴で使用された調味料入れやナプキンホルダ、宴を飾っていた花や花瓶などはときに新郎新婦の名前が入っており、ゲストは記念品 (*recuerdos*) としてこれらを持ち

帰ってもよい。記念品の持ち帰りはゲストの裁量に委ねられているため、とくに決まった引き出物は必要とされないのである。

以上、メキシコの披露宴について5つのトピックをたて述べてみた。要素を部分的に取り出した説明に過ぎないが、儀式的性格が強く形式を重んじる日本のものに比べると、メキシコの披露宴は祝祭的性格が強く、個と個の関係性や個の柔軟性が重視される場であることがわかる。実際のところ、メキシコシティの披

露宴だけでもその模様にかかなりの多様性が見られ、また、変容し続けている。その背景には、国内のさまざまな地域出身者による住民構成という首都圏に特徴的な要因があるだろうし、他方、貧富間の極端な格差という深刻な経済的問題があることも忘れてはならない。今回は、冠婚習俗をめぐるいくつかの問題を放置することになるが、詳細な事例検証や具体的な問題提示と分析については今後の課題とさせていただく。

(同志社大学非常勤講師)

お知らせ

天理大学アメリカス学会は、きたる11月28日(土)12:00から天理大学研究棟第1会議室において**第14回年次大会**を開催します。

【研究発表】

13:00 - 14:00: 研究発表

加藤匡人(天理教海外部翻訳課: 宗教社会学)
「日系アメリカ人天理教信者の研究 宗教、民族、人種アイデンティティをめぐる」

14:00 - 15:00: 研究発表

杓谷茂樹(中部大学国際関係学部准教授: 文化人類学)
「世界遺産としてのマヤ遺跡公園 チチエン・イツァの場合」(仮題)

【特別講演】

15:00 - 16:30

藤本茂生(帝塚山大学人文学部教授: アメリカ史)
「アメリカ史における「トランスナショナル」研究」

特別講演をしていただく藤本茂生(ふじもと・しげお)先生は米国における教育・家族・子どもの文化史を主たるテーマにしておられ、米国の文化史が国内だけでなく、太平洋を越えた東アジアとの双方向的な交流においても展開したことを分析しておられます。ご著書の『アメリカ史のなかの子ども』彩流社(2002)は、現代とは異なる規範のなかで生きた子どもたちの生活とその変貌を描き、『子どもたちのフロンティア 独立建国期のアメリカ文化史』ミネルヴァ書房(2006)は、子どもの生活を通じて独立建国期の米国史を描いたものであり、ともにアメリカ学会、アメリカ史学会、子ども学会、比較家族史学会等で高い評価

を得ております。天理大学アメリカス学会の活動にもご尽力いただき、今年度学会誌にもご玉稿をいただいております。

会員の皆様ばかりでなく、学生や一般の地域住民の方々のご来場も歓迎します。入場は無料です。

編集後記

巻頭言は会長の片倉充造先生(天理大学教授)です。オバマ大統領がノーベル平和賞を受賞したことは記憶に新しいですが、原稿はそれ以前にいただいたものです。原爆投下のみならず、かならずしも世界平和の構築に貢献してきたとは言いがたい米国史を多数の文学作品を通して活写したうえで、オバマの米国が名実ともにノーベル平和賞に値する国家になることに期待を寄せておられる巻頭言は、まだ実績のないオバマ大統領に平和賞を与えた選考委員会の思いと共鳴するものでしょう。

当学会の年会費は一般会員は、5,000円です(入会金はありません)。なお、一般会員とは別に、賛助会員を募集致しております。賛助会員の会費は年1口3万円です。

天理大学アメリカス学会に関するお問い合わせは下記へお申し出ください。

天理大学アメリカス学会ニューズレター

(No. 61: 2009年11月10日発行)

編集者: 片倉充造

〒632 8510 天理市杣之内町 1050

天理大学国際文化学部ヨーロッパ・アメリカ学科内

天理大学アメリカス学会

電話: 0743-63-9076

Fax: 0743-62-1965

e-mail: tuaas@sta.tenri-u.ac.jp

http://www.tenri-u.ac.jp/tngai/americas/